

自治体改革を先導した鳴海正泰さん

神原 勝

鳴海正泰さんが、二〇二一年二月二日、八九歳で旅立たれた。今日につながる自治体の力量の増大を定礎した一九六〇年代の自治体改革の黎明期から、自治体が成長したがゆえに可能になった一九九〇年代以降の分権改革期にいたるまで、実践と理論の両面から市民と自治体の成熟に向けた改革を先導してきた。その熱い想いは一九六〇年に、盟友・松下圭一さんと「地域民主主義」「自治体改革」を提起したとき以来、いささかも揺らぐことはなかった。

二〇歳代半ばの鳴海さんは、東北大学の歴史学の助手だったが、自治体問題では日本で最初の市民型シンクタンクとして設立された東京都政調査会から請われて初代の研究員になった。一九五六年のことである。この調査会で、当時はめずらしかった市民運動や各地に点在する革新首長と交流しながら、市民と自治体の可能性を追究し、松下さんから若手の学者研究者とも親交を深めながら、自治体問題の改革型専門家として力量をみがかれた。一九六三年に横浜革新新市政が誕生すると、飛鳥田市長に請われて市役所に入庁し、少しあとに入庁した田村明さんとブレインとして市政を支えた。この一九六三年の第五回統一自治体選挙では大量の革新首長が当選した。翌年には飛鳥田さんを会長に全国革新市長会が結成される。以後一九六〇・七〇年代をとおして、革新自治体による公開と参加を基調

とした自治体改革が急速に進展するが、鳴海さんはつねにその中心にいて改革を牽引された。

一九八〇年に市役所を退いたあとは関東学院大学の教授として教鞭をとられるかたわら、晩年まで、主として「地元」である神奈川県を舞台に多彩な活動を続けられた。そうした活動のなかで「自治体学」という言葉を造語し、政府としての自治体の成熟による市民自治の深化のために、市民、自治体職員、研究者らによる新たな自治研究の必要も説いている。これが一九八六年の自治体学会の設立に接続し現在にいたっている。

鳴海さんは多数の著書を上梓された。『都市変革の思想と方法』れんが書房一九七三年、『地方自治体入門』日本経済新聞社一九八一年、『戦後自治体改革史』日本評論社一九八二年、『転換期の市民自治』日本経済評論社一九八七年、『地方自治を見る眼』有斐閣一九九一年、『地方分権の思想』学陽書房一九九四年、『自治体改革のあゆみ』公人社二〇〇三年がある。自治研究を志す後学の徒にとっては、どれも自治体改革の歴史と思想を学べる有益な書である。

歴史学徒であった鳴海さんは、現在の事象に立ち向かうとき、過去をしつかり検証して未来を構想する。こうした思考方法はその著書にも通底している。鳴海、松下の両大人にひと回り若い大矢野修さんと私がかかわって、大部の『資料・革新自治体』日本評論社一九九〇年（正）・一九九八年（続）を編集

出版したことがある。一九六〇年代以降の革新自治体の先駆的営為を資料集として編纂したものが、これも鳴海さんと歴史重視の想いを共有して実現した。

私が鳴海さんに最初にお目にかかったのは一九六四年、大学三年の時であった。市役所に入庁した鳴海さんの初仕事は『市民生活白書』の刊行で、その白書がみたたくて市役所までうかがった。市民に市政の現状を知らせる、情報公開事始めの先駆的な仕事であった。卒業して数年後、私は調査会の研究員となり、期せずして鳴海さんの後輩を拝することになった。それから晩年まで居場所はずいぶん変わったがずっとおつきあいいただいた。

最後にお会いしたのは二〇一五年二月二十七日。横浜市内を少し散策し、上林得郎さんをまじえて昼食をともしながら和やかな一時をすごした。私はその翌日、闘病中の松下さんを小平市の自宅にお見舞いした。鳴海さんに話題がおよんで、先生は「鳴海は文章がうまくて、うらやましく思ってたものだ」と、若きころの盟友に想いを馳せておられた。このときの横浜・東京行きが、私が鳴海さんと松下さんにお会いする最後の機会となった。

同年五月六日、松下さんが逝去された。鳴海さんは、そのご開かれた送る会に体調不良で出席できなかつたことから、考えていた追悼の辞をふくらませて「松下圭一の『自治体改革・都市政策論』の源流——一九六〇年代・戦後日本の転換期のなかで」（自治研かながわ二〇一六年八月号）をしたためられた。若い二人の交流のなかから、新しい市民自治の時代を理論的・実践的に切り拓こうとする躍動感が伝わってくる。

この原稿の校閲を依頼されて何度かやりとりすることになり、これが鳴海さんと交わした最後のメールとなった。合掌

へかんばら まさる 北海道大学名誉教授／当研究所顧問